

<新刊紹介> 中谷功治著 『ビザンツ帝国：千年の興亡と皇帝たち』 (中公新書) (中央公論新社、vi + 304頁、2020年6月刊、940円)

| | |
|-----|---|
| 著者 | 貝原 哲生 |
| 雑誌名 | 関学西洋史論集 |
| 号 | 44 |
| ページ | 55-57 |
| 発行年 | 2021-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10236/00029436 |

〔新刊紹介〕

中谷 功治 著

『ビザンツ帝国：千年の興亡と皇帝たち』（中公新書）

（中央公論新社、vi+304 頁、2020 年 6 月刊、940 円）

貝 原 哲 生

本書はビザンツ帝国史の概説書であるが、その特色は、独自に定義した「ビザンツ世界」を縦糸、特徴的な皇帝の事績を横糸として、概ね一世紀ごとに具体的なテーマを設定して話を進める点にある。本書が指す「ビザンツ世界」とは凡そ東西はアルメニアからイタリア、南北は黒海北岸から北アフリカまでの地域を含む、ビザンツ影響圏とでも呼ぶべき地域であり、7 世紀に確定し、12 世紀末には解体に向かう。著者の言葉を借りれば、この期間にこそビザンツは、その歴史的世界のもとで新たな発展を遂げ、周辺領域の人々と交わりつつユニークな歴史を展開させたのである。

本書は序章と終章を含め 8 つの章で構成されている。以下、手短にその内容を紹介する。序章と第 1 章では、「初代ビザンツ皇帝」コンスタンティヌス（在位 324-327 年）とその先駆者ディオクレティアヌス帝（在位 284-305 年）の治世からユスティニアヌス帝（在位 527-565 年）の再征服活動を経て、7 世紀のヘラクレイオス朝の時代に「ビザンツ世界」が明確になるまでの歴史が描かれる。

第 2 章では、8 世紀のユニークな現象であるイコノクラスム、皇妃コンクールとそれに端を発する姦通論争、そしてそれらと深く関連する皇帝教皇主義について、一般に知られる通説と最新の研究動向、ならびに著者の見解が示される。

第 3 章では、20 世紀に入り「最悪の君主」から「改革者」へと 180 度評価

が逆転した皇帝ニケフォロス1世（在位 802-811 年）の「十の悪行」とりわけバルカン半島政策と、彼との関連が指摘されているテマ制の考察がなされ、9世紀には自ら軍を率いて勝利する皇帝が求められていたことが指摘される。またテマ制について、著者はテマ自生論に立ち、自生の契機を8世紀の「混乱の20年」とイサウリア朝の諸帝に見る。

第4章の主演はコンスタンティノス7世（在位 913-959 年）である。ここではコンスタンティノス7世以前の文芸復興の実態を踏まえた上で、彼の治世の頃にそれが頂点に達したこと、そして、彼が政治に一定の距離を置いて文化活動に専念できた理由として、この時代に新たに貴族勢力の台頭が顕著になったことが述べられる。

ところで研究史上、11世紀はビザンツ帝国にとっての大転換期に位置づけられている。第5章では、バシレイオス2世（在位 963-1025 年）の治世に絶頂を迎えた帝国が、彼の死後、約半世紀の間に内憂外患を抱えて急速に衰退していく様子が描かれ、その原因として中央集権制の弛緩と外部勢力への依存度の増大が挙げられる。

第6章は、一世紀続くコムネノス朝を打ち立てたアレクシオス1世（在位 1081-1118 年）の戦いの日々を彼の娘アンナ・コムネナ（コムニニ）の『アレクシアス』の記述を頼りにたどるところから始まる。アレクシオスが国難と言える状況を克服できた理由は、彼が有力貴族家門を自身のコムネノス家との姻戚関係の網に取り込み形成された、「コムネノス一門」と呼ばれうる疑似的大家族が政権中枢を担ったこと、そしてその家父長として親征を繰り返すことにより指導力を発揮し、皇帝としての専制的地位を確立したことにあった。

しかし、国家とコムネノス一門が同一化した体制は皇帝の資質に大きく依存する諸刃の剣であり、ラテン的西方への深い関与や権力と資源の首都コンスタンティノープルへの集中と相俟って、アレクシオスの孫マヌエル1世（在位 1143-1180 年）の死後、わずか四半世紀でビザンツ帝国は第四回十字軍の攻撃により滅亡するのである。

本書は、これをもってコンスタンティノープルを中心とした「ビザンツ世

界」も終焉を迎えたとする。また、13世紀半ばにコンスタンティノープルを奪回した後、約二世紀間続くパライオロゴス朝は中央集権を旨とする君主体制ではないことから、ビザンツ「帝国」には含めないとする立場をとるが、最後に、同王朝の歴史をとりわけ婚姻政策を中心に概観するとともに、最末期のビザンツの姿を示す事例としてフェラーラ・フィレンツェ公会議に参加した人々を紹介することで終章としている。

本書では、千年にも及ぶビザンツ帝国の主に政治史が簡潔に整理され、研究史上の問題点も折に触れて適切に指摘されている。また、各章冒頭には関連する皇帝のリスト、章末には本文を補足するコラムが挿入されており、ビザンツ学の初心者にも親切な設計となっている。

「おわりに」で著者は、ビザンツ史を志した頃、日本人の手によるビザンツ史の書籍は四冊しかなかったと回顧するが、以来今日に至る40年間の日本のビザンツ学の裾野の拡がりには、巻末の主要参考文献リストの充実から一目瞭然であり、感慨深い。

我が国においてはすでに井上浩一氏の『生き残った帝国ビザンティン』（講談社学術文庫）や根津由喜夫氏の『ビザンツの国家と社会』（世界史リブレット）といった優れた概説書が存在しているが、本書は、国内外を問わず、最新の研究成果を上手く取り入れアップデートされたビザンツ史の入門書として最適ではないだろうか。